

新約聖書から知る旧約時代のバプテスマ

旧約聖書の時代の東半球にバプテスマはあったのか
それは如何なるものか

はじめに、預言者イザヤの預言を聖書とモルモン書から引用する。主が、イスラエルの民に、彼らが 70 年続いたバビロンでの捕囚から帰るときに、何をしなければならないかを教えようとされている部分だ。主はイザヤを通して、ユダの民は名前だけはしっかりしているけれども、実がともなっていないと叱責している。彼らは捕囚されたバビロンの地で、偶像礼拝を導入していたが、完全には異教徒にならず、自分たちはイスラエルの名で呼ばれ、主なる神を呼び求め、また聖なる都のものと名乗る正統派だと自負していた。しかし、主は彼らには、肝心の誠実さと正義が欠けていると言っている。

まず、日本聖書協会口語訳旧約聖書(旧約 1955 年/新約 1954 年、以下口語訳と称する)のイザヤ 48:1-2 に次のようにある。

48:1 ヤコブの家よ、これを聞け。

あなたがたはイスラエルの名をもってとなえられ、
ユダの腰から出、
主の名によって誓い、
イスラエルの神をとなえるけれども、
真実をもってせず、正義をもってしない。

48:2 彼らはみずから聖なる都のものととなえ、
イスラエルの神に寄り頼む。
その名は万軍の主という。

同様の内容のイザヤの預言をニーファイが引用し、兄たちに読んで聞かせたことが、モルモン書の 1 ニーファイ 20:1-2 に記録されている。

20:1「イスラエルという名で呼ばれ、ユダの水から、すなわちバプテスマの水から出て、主の名によって誓い、イスラエルの神のことを口にしながら真実をもって誓わず、義をもっても誓わないヤコブの家よ、耳を傾けてこれを聞け。

20:2 しかし、彼らは、自ら聖なる都の者であると言いながら、万軍の主であるイスラエルの神にとどまるこをしない。まことに万軍の主とは主の名である。」

概ね同じ内容だが、ヤコブの家系が口語訳イザヤ 48:1 の「ユダの腰から出」とモルモン書 1 ニーファイ 20:1 の「ユダの水から、すなわちバプテスマの水から出て」という部分が大きく異なる。

口語訳はアメリカの RSV(Revised Standard Version)を参照した日本初の口語体の聖書で刊行から 10 年間で旧新約が 86 万部以上、新約のみが 42 万部以上、計 120 万部以上売れた。しかし発刊当初から、冗長性や人称代名詞、文体の問題が指摘され、新改訳聖

書、共同訳聖書に取って代わられるようになった。時代も社会も異なる背景で書かれた文章には、読者が正しく理解できるように意味・意図を変えずに言葉を選びながら、その箇所で読者に何を伝えようとしているのかを把握し、何故そこでそれを語っているかを見出すという困難な作業を伴う。そのためどうしても、本来の意味・意図が伝わりにくい部分が残り、結果的に聖書間に相違が生じる。口語訳の場合、参考とした RSV の影響を強く受けている。RSV のイザヤ 48:1 は次のようにになっている。

Hear this, O house of Jacob,
who are called by the name of Israel,

and who came forth from the loins of Judah;
who swear by the name of the Lord,
and confess the God of Israel,
but not in truth or right.

口語訳の「ユダの腰から出」は、came forth from the loins of Judah を参考にして、バビロンから帰るイスラエルの民(ヤコブの家)の出自を表現している。

この部分が欽定訳(King James Version、以下 KJV と称する)では、次のように are come forth out of the waters of Judah(ユダの水から出、)となっている。

Hear ye this, O house of Jacob, which are called by the name of Israel, and are come forth out of the waters of Judah,

この the waters of Judah の表現は、民族の出自というよりも、現在の立場に至った経緯、水で清められたユダから出たという印象を感じさせる。日本語のものでは、新共同訳聖書のイザヤ 48:1 が、これに近い表現になっている。

ヤコブの家よ、これを聞け。ユダの水に源を発し
イスラエルの名をもって呼ばれる者よ。まことなく、恵みの業をする
こともないのに
主の名をもって誓い
イスラエルの神の名を唱える者よ。

モルモン書では、KJV、新共同訳聖書のイザヤ書の「ユダの水」が、「すなわちバプテスマの水」であることを指摘している。旧大陸(東半球)で伝承された旧約聖書の中のイザヤの言葉と、紀元前 600 年ごろに新大陸(西半球)に持ち出された記録に含まれていた預言者イザヤの言葉に違いが生じるのは、伝承に要した長い時間の経過とその手段を考えると避けられないことだ。しかし、差異があっても正しく翻訳すれば大意は変

わらない。引用した部分から分かることは、少なくともイザヤのいた時代にもバプテスマがあったということだ。「ユダの水」から出たイスラエルとは、後述する1コリスト1-4にあるように、エジプトを脱出したイスラエルの民が、「モーセにつくバプテスマ」の水から出た民族であることを示す。また、この後に述べるいくつかの新約聖書の記述からも、旧約時代の東半球のユダヤの人々の中に、不完全なものであるが、バプテスマが存在していたことが分かる。

以下日本語の新約聖書からの引用では、口語訳を使用している。

マタイの福音書 3:7-8 バプテスマのヨハネに対するパリサイ人の反応

バプテスマのヨハネが旧約時代の「古い契約のバプテスマ」を施していましたが、彼がユダヤの荒野で「悔い改めよ、天国は近づいた」と宣言したときのパリサイ人たちの反応によって分かる。ヨハネがバプテスマを行なっていたときに、実際に一部のパリサイ人たちもエルサレムから、バプテスマのヨハネのもとに来てバプテスマを求めたのである。

口語訳マタイ 3:7-8

3:7 ヨハネは、パリサイ人やサドカイ人が大せいバプテスマを受けようとしてきたのを見て、彼らに言った、「まむしの子らよ、迫ってきている神の怒りから、おまえたちはのがれられると、だれが教えたのか。」

3:8 だから、悔改めにふさわしい実を結べ。

パリサイ人やサドカイ人たちがバプテスマを受けようとして来たときに、バプテスマのヨハネは「まむしの子らよ、」と彼らを叱った。しかし、そのパリサイ人は、バプテスマのヨハネがバプテスマを行なうことに抗議していない。バプテスマを行なうことは彼らにとって躊躇ではなく、むしろ、自分たちもバプテスマを受けたいと思ってヨハネのもとにやって来たのだ。このことからもバプテスマのヨハネが施していたバプテスマが旧約時代の「古い契約のバプテスマ」であることがわかる。その儀式は、キリストが復活した後にはじめて新しい契約の儀式へと生まれ変わったのである。

マタイの福音書 11:11-14、ルカの福音書 7:24-29 先駆者バプテスマのヨハネと古い契約のバプテスマ

牢獄に捕えられているバプテスマのヨハネは、イエスが行った数々のみ業を聞いて、この方が、自分が待っている方かを尋ねるために二人の弟子をイエスのもとに遣わした。二人はイエスから答えを聞き、ヨハネに伝えるために帰つて行った。その後、イエスが群衆に次のように語った。

口語訳マタイ 11:7-14、ルカ 7:24-29

11:7 彼らが帰つてしまふと、イエスはヨハネのことを群衆に語りはじめられた、「あなたがたは、何を見に荒野に出てきたのか。風に揺らぐ葦で

あるか。」

11:8 では、何を見に出てきたのか。柔らかい着物をまとった人か。柔らかい着物をまとった人々なら、王の家にいる。

11:9 では、なんのために出てきたのか。預言者を見るためか。そうだ、あなたがたに言うが、預言者以上の者である。

11:10『見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、あなたの前に、道を整えさせるであろう』と書いてあるのは、この人のことである。

11:11 あなたがたによく言っておく。女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった。しかし、天国で最も小さい者も、彼よりは大きい。

11:12 バプテスマのヨハネの時から今に至るまで、天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている。

11:13 すべての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までである。

11:14 そして、もしあなたがたが受けいれることを望めば、この人こそは、きたるべきエリヤなのである。

あなたがたが見に行ったのは「風に揺らぐ葦」のような世間に追従する日和見主義のものや、「柔らかい着物をまとった」この世の富を生きがいとする人々ではないはずだ。 では何を見に行ったのか。「預言者か、そうだ」。あなたがたは預言者であるヨハネを見るために荒れ野へ行ったのだ。預言者は、神からのみ言葉を預かり、それを人々に伝える人だ。そのヨハネに会い、神のみ言葉を聞くために荒野に出かけて行ったのではないのかとイエスは言う。

さらにイエスはバプテスマのヨハネは、「預言者以上の者である。」と続ける。イエスは、マラキ 3:1 を引用し、「『見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、あなたの前に、道を整えさせるであろう』と書いてあるのは、この人のことである。」と断言する。預言者以上の者とは、このマラキ書が告げている、救い主のために道を準備する使者のことだ。 預言者たちは神のみ言葉を預けられそれを人々に語る。 その中には、救い主の到来を予告する言葉もあった。しかしヨハネは、そういった預言者の一人としてではなく、救い主の直前を歩み、その道を整えるという特別な使命を与えられた先駆者であった。それゆえ、「女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない。」つまりこれまで生まれた人間の中で、ヨハネより偉大な者はいないと言っている。イエスの言葉によると、ヨハネは、古い契約の預言者の中で一番すぐれた者ではあるが、神の御国の一一番小さい者でもバプテスマのヨハネよりも偉大だという。 バプテスマのヨハネは、古い契約の人物だからだ。この古い契約の祭司である預言者がイスラエルに現われ、「古い契約のバプテスマ」を施したのだった。

それは、「すべての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までである。」という言葉で分かる。「律法と預言者」の時代、すなわち旧約聖書の時代の預言者はヨハネの時までだ。 それ以降は「神の国が宣べ伝

えられ(ルカ 16:16)」る新約の時代になる。ヨハネは律法と預言者の旧約聖書の時代の最後に立って、新しい時代の到来を告げた旧い時代の最も偉大な預言者だった。それゆえバプテスマのヨハネが、施すバプテスマは古い契約のバプテスマなのである。

マルコの福音書 7:3-4 旧約時代の無用なバプテスマ

マルコ福音書 7 章(マタイ 15:1-2, ルカ 11:38-39)に、パリサイ人たちはもともと律法では命じられていない「洗い」を「昔の人の言伝えをたく守って」律法に加えていたことが次のように書かれている。

口語訳マルコ 7:3-4

7:3 もともと、パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人の言伝えをたく守って、念入りに手を洗ってからでないと、食事をしない。

7:4 また市場から帰ったときには、身を清めてからでないと、食事をせず、なおそのほかにも、杯、鉢、銅器を洗うことなど、昔から受けついでかたく守っている事が、たくさんあった。

ここでは、パリサイ人が旧約聖書に付け加えた「杯、水差し、銅器」の儀式的な「洗い」について述べている。この「洗い」はギリシャ語本文では、βαπτισμοὺς (バプテスマ)となっており、旧約の中のユダヤ人の「バプテスマ」がどのようなものであったかを知る手掛かりになる。この個所のギリシャ語本文を NESTLE-ALAND 第 28 版(以下 NA28 と称する)から引用する。

NA28 KATA MAPKON 7:4

καὶ ἀπ' ἀγορᾶς ἔὰν μὴ βαπτίσωνται οὐκ ἐσθίουσιν, καὶ ἄλλα πολλά ἔστιν ἃ παρέλαβον κρατεῖν, βαπτισμοὺς ποτηρίων καὶ ξεστῶν καὶ χαλκίων [καὶ κλινῶν]—
βαπτισμούς ποτηρίων καὶ ξεστῶν καὶ χαλκίων を直訳すると「杯、鉢、銅器のバプテスマ」ということなる。ギリシャ語で、「洗い」は「バプテスマ」を意味する。語源は「浸す」、「沈める」という言葉。

食前に手を洗う儀式は、衛生上のものではなく、ユダヤ教の中で厳格に守られてきたきよめの儀式だった。本来のこの儀式は、いけにえをささげる前に手と足を洗いきよめてから幕屋の務めをする祭司に対するものだった。その儀式が、拡大解釈され、一般の人々も食事のたびごとに清めの儀式を行うように律法に定められ。そのような儀式なので手の洗い方には様々な規定があった。厳格なユダヤ人は、食事の前だけでなく食事の間にも料理が変わるたびにこれを行った。

パリサイ人の指摘した昔からの言い伝えに対し、イエスが語った言葉がルカ 11:39-41 に書かれている。

11:39 そこで主は彼に言われた、「いったい、あなたがたパリサイ人は、杯や盆の外側をきよめるが、あなたがたの内側は貪欲と邪悪とで満ちている。」

11:40 愚かな者たちよ、外側を造ったかたは、また内側も造られたではないか。

11:41 ただ、内側にあるものをきよめなさい。そうすれば、いつさいがあなたがたにとって、清いものとなる。

ヨハネの福音書 1:25

ヨハネ 1:25 で、エルサレムからやって来たパリサイ人たちがバプテスマのヨハネにどんな権威によってバプテスマを授けているのか問いただしている。

口語訳ヨハネ 1:25

25 彼らはヨハネに問うて言った、「では、あなたがキリストでもエリヤでもまたあの預言者でもないのなら、なぜバプテスマを授けるのですか。」

KJV John 1: 25

And they asked him, and said unto him, Why baptizest thou then, if thou be not that Christ, nor Elias, neither that prophet?

NA28 KATA ΙΩΑΝΝΗΝ

καὶ ἡρώτησαν αὐτὸν καὶ εἶπαν αὐτῷ· τί οὖν βαπτίζεις εἰ σὺ οὐκ εἶ ὁ χριστός οὐδὲ ἡλίας οὐδὲ ὁ προφήτης;

彼らは「バプテスマとは何なのか。新しい儀式を作ったりして、自分を何様だと思っているのか」というようなことは言っていない。バプテスマの儀式は旧約聖書の律法にある儀式なので、バプテスマを行なうこと自体は、パリサイ人にとっては何の矛盾もなく、儀式自体については疑問がないのである。

コリント人への第一の手紙 10:1-4 モーセにつくバプテスマ

ギリシャ最大の貿易港だったコリント教会は活発な教会であったが、分派争いや諸問題があった。このためパウロは、弟子をつかわし、あるいは手紙を書き、彼自身も出かけて指導する必要があった。

そのような背景で書かれたコリント人への第一の手紙の 7 章から 14 章は、コリントの聖徒からの疑問点に対するパウロの回答となっている。このうち第 10 章では、古代イスラエル史の教訓を示しながら、失格者とならぬよう指導し、偶像礼拝の問題に入っているのだが、まず、1 節から 4 節で古代イスラエルのバプテスマについて述べている。ここでパウロが「わたしたちの先祖」と言っているのは、ユダヤ人のみならず異邦人を含む全キリスト者としてのイスラエルを指す。何故なら、キリスト者はすべてアブラハムの子(ガラテヤ 3:7)であり、神のイスラエル(ガラテヤ 6:16)だからで

ある。それゆえ、その先祖である古代イスラエルの民がモーセに導かれた歴史の教訓をコリントの聖徒にも「知らずにいてもらいたくない」と次のように述べている。

口語訳 1 コリント 10:1-4

1 兄弟たちよ。このことを知らずにいてもらいたくない。わたしたちの先祖はみな雲の下におり、みな海を通り、

2 みな雲の中、海の中で、モーセにつくバプテスマを受けた。

3 また、みな同じ靈の食物を食べ、

4 みな同じ靈の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについてきた靈の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない。

同じ個所の KJV と NA28 を以下に示す。

KJV 1Corinthians 10:1-4

1 Moreover, brethren, I would not that ye should be ignorant, how that all our fathers were under the cloud, and all passed through the sea;

2 And were all baptized unto Moses in the cloud and in the sea;

3 And did all eat the same spiritual meat;

4 And did all drink the same spiritual drink: for they drank of that spiritual Rock that followed them: and that Rock was Christ.

NA28 ΠΡΟΣ ΚΟΡΙΝΘΙΟΥΣ Α' 10:1-4

1 Οὐ θέλω γὰρ ὑμᾶς ἀγνοεῖν, ἀδελφοί, ὅτι οἱ πατέρες ἡμῶν πάντες ὑπὸ τὴν νεφέλην ἤσαν καὶ πάντες διὰ τῆς θαλάσσης διῆλθον

2 καὶ πάντες εἰς τὸν Μωϋσῆν ἐβαπτίσθησαν ἐν τῇ νεφέλῃ καὶ ἐν τῇ θαλάσσῃ

3 καὶ πάντες τὸ αὐτὸ πνευματικὸν βρῶμα ἔφαγον

4 καὶ πάντες τὸ αὐτὸ πνευματικὸν ἔπιον πόμα· ἔπινον γὰρ ἐκ πνευματικῆς ἀκολουθούσης πέτρας, ἡ πέτρα δὲ ἦν ὁ Χριστός.
(ε+βαπτίσ+θησαν = They were baptized)

彼らは「みな雲の下」にいた(出エジプト 13:21)。彼らは神の特別な守りと導きを受けて、雲は太陽の熱から守り、道を示した。また神は紅海を二つに分けて、「みな海を通」った(出エジプト 14:21 以下)。そして神の摂理と恵みにより「みな雲の中、海の中で、モーセにつくバプテスマを受けた。」(πάντες εἰς τὸν Μωϋσῆν ἐβαπτίσθησαν ἐν τῇ νεφέλῃ καὶ ἐν τῇ θαλάσσῃ)のであった。彼らは「みな同じ靈の食物を食べ」(出エジプト 16:4,14-18)、また「みな同じ靈の飲み物を飲んだ。」それは「靈の岩」から出た(民数 20:7-13) 生命の水であった。旧約聖書

で、岩は主(詩編 18:2 など)であり、パウロは「この岩はキリストにほかならない。」と断言する。

このようにパウロは旧約聖書のイスラエルの出エジプトの史実を「バプテスマ」という言葉を使って説明している。これをどのように解釈するにしても、旧約聖書のイスラエルの民の中に「バプテスマ」と呼ぶべきものがあったという事実は否定できないだろう。

出エジプトの史実の他に、バプテスマを象徴するものとしてノアの洪水を取り上げている記述がペテロ第一の手紙 3:18-22 にある。ここはキリストの苦難と勝利がテーマになっており、19 節に「自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた」キリストが「靈において…獄に捕われている靈」を訪れ御言葉を「宣べ伝え」られたことが書かれている。そして 20-21 節で、神が預言者ノアの口を通して語られた警告の言葉を受け入れず悔い改めようとしない人々が洪水で流し去られた出来事をバプテスマの儀式にたとえ、続く 21 節でバプテスマとは「イエス・キリストの復活によるのであって、からだの汚れを除くことではなく、明らかな良心を神に願い求める」と教えている。このように、真のバプテスマは、キリストの贖いの犠牲とそれに続く復活とによるものであることをペテロが宣教していた当時の人々に伝えるのがこの部分の目的であって、旧約時代のバプテスマについて述べたものではないのだが引用しておく。

口語訳 1 ペテロ 3:20-21

3:20 これらの靈というのは、むかしノアの箱舟が造っていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった。

3:21 この水はバプテスマを象徴するものであって、今やあなたがたをも救うのである。それは、イエス・キリストの復活によるのであって、からだの汚れを除くことではなく、明らかな良心を神に願い求めるのである。

ヘブル人への手紙 9:9-12 種々の洗いごと 種々のバプテスマ

ヘブル人への手紙は、初代教会に存在したエビオン派という、ユダヤ教の習慣をすべて維持したままキリスト教徒になった人々に対する批判として書かれたと考えられている。そのためパウロは、福音はモーセの律法を更新するものでなく、廃止するものであり、新しい契約が古い契約にとて変わったということを強調している。9 章でまず旧約の礼拝規定の限界を述べ、「洗い」を含む、旧約祭司のいろいろな儀礼が、儀礼化、形骸化した不完全な「肉の規定」にすぎず、真実の悔い改めと再生に至らしめなかつた事実を批判している。

口語訳ヘブル 9:10-12

9:9 この幕屋というのは今の時代に対する比喩である。すなわち、供え物やいけにえはさげられるが、儀式にたずさわる者の良心を全うすることはできない。

9:10 それらは、ただ食物と飲み物と種々の洗いごとに関する行事であつて、改革の時まで課せられている肉の規定にすぎない。

9:11 しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、

9:12 かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。

パウロは「幕屋」は新約の時を待つ「比喩」に過ぎず、また「律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたちをそなえているものではない…」(11:1)と教える。「肉の規定」である供え物と犠牲奉獻などの外形的な行事では、罪過の根本的解決に至らず、「改革の時」に「祝福の大祭司」であるキリストがそれらの不足しているところを全部成就してくださった(9:11-12)のである。

パウロが述べている旧約聖書の律法の「洗い」を示すのにβαπτισμα (バプティスマ: 単数形)を用い、「種々の洗いごと」διαφόροις βαπτισμοῖς (ディアフォーロイス バプティスマース 複数形)と言っている。ギリシャ語で、「洗い」は「バプテスマ」を意味し(前述マルコの福音書7:3-4)、ここから「種々のバプテスマ」が旧約聖書の中にあったことが分かる。パウロが、旧約聖書の「洗い」の儀式を指して、それを「バプテスマ」と呼んでいるのであれば、旧約聖書のモーセの律法の「種々の洗いごと」を「種々のバプテスマ」と考えてよいだろう。しかし、旧約の「種々のバプテスマ」は、形骸化した不完全な「肉の規定」にすぎず、悔い改めのバプテスマからほど遠いものだった。そのためティンダルはじめ、聖書学者は、βαπτισμαを「バプテスマ」ではなく、「洗いごと」(washings)と訳したと考えられる。ほとんどの聖書は、それに倣って「洗い」、「沐浴」、「清め」という言葉を使っているが、1545年版ルター訳聖書(LUTH1545)は、mancherlei Taufen (various baptisms、種々のバプテスマ)と直訳している。

NA28 ΠΡΟΣ ΕΒΡΑΙΟΥΣ 9:10

μόνον ἐπὶ βρώμασιν καὶ πόμασιν καὶ διαφόροις βαπτισμοῖς, δικαιώματα σαρκὸς μέχρι καιροῦ διορθώσεως ἐπικείμενα.

欽定訳では、次のようにδιαφόροις βαπτισμοῖς を divers washings 「種々の洗いごと」と訳している。

KJV Hebrews 9:10

Which stood only in meats and drinks, and divers washings, and carnal ordinances, imposed on them until the time of reformation.

1545年版ルター訳聖書(LUTH1545)「種々のバプテスマ」と訳して

いる。

allein mit Speise und Trank und mancherlei Taufen und äußerlicher Heiligkeit, die bis auf die Zeit der Besserung sind aufgelegt.

1984年版Lutherbibelでは、「種々の洗いごと」と訳している。

Dies sind nur äußerliche Satzungen über Speise und Trank und verschiedene Waschungen, die bis zu der Zeit einer besseren Ordnung auferlegt sind.

新世界訳聖書では、

「やさまざまな洗いの儀式」としているが、脚注に[直訳、「さまざまなバプテスマ」。]と注記している。

なぜ旧約聖書にバプテスマという言葉がないのか

「だれでも水と靈から生まれなければ、神の国にはいることはできない。」(ヨハネ3:5)。バプテスマには、小神権すなわちアロン神権の権能による水のバプテスマと、大神権すなわちメルキゼデク神権の権能による聖靈のバプテスマの二種類(マルコ1:1-8;ルカ3:15-16)がある。バプテスマのヨハネが行っていたものは前者であった。バプテスマにこれらの二種類がある経緯は以下のとおりである。

バプテスマは最初ひとつしかなかった。最初というのは、時のはじまりの頃のアダムのバプテスマであるが、彼はすべての神権時代の鍵を持っていたので完全なバプテスマを行うことができた。ところが、その後、イスラエルの民全体が、キリストの完全な永遠の福音に属する律法に従って生活することができなくなった。そのため、大神権を含む神権の鍵がモーセとともにイスラエルの民から取り去られた。しかし、主は大神権の代わりに小神権を授け、完全な福音の代わりに準備の福音、すなわち肉にかかる戒めの律法であるモーセの律法を与えて民を訓練する方法とした。この「モーセの律法にもとづく小神権の儀式」の始まりが、古い契約のバプテスマの始まりとなった。言い換えると小神権のバプテスマの始まりが、古い契約のバプテスマの始まりということになる。

罪のないイエスは悔い改めの必要はなかったが、バプテスマのヨハネに「今は受けさせてもらいたい。このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」(マタイ3:15)と言い、古い契約のバプテスマであるアロン神権のバプテスマを受けられて、バプテスマが神の王国の王でさえ、王国に入るために不可欠な儀式であることを示された。そしてイエスによって聖靈がさずけられるようになり、それ以後のバプテスマは、神の計画による人が救いと昇栄の道に入るための新しくかつ永遠の聖約となつた。

口語訳ヨハネ3:22-30

3:22 こののち、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らと一緒にそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。

3:23 ヨハネもサリムに近いアイノンで、バプテスマを授けていた。そこには水がたくさんあったからである。人々がぞくぞくとやってきてバプテスマを受けていた。

3:24 そのとき、ヨハネはまだ獄に入れられてはいなかった。3:25 ところが、ヨハネの弟子たちとひとりのユダヤ人との間に、きよめのことで争論が起った。

3:25 ところが、ヨハネの弟子たちとひとりのユダヤ人との間に、きよめのことで争論が起った。

3:26 そこで彼らはヨハネのところにきて言った、「先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています」。

3:27 ヨハネは答えて言った、「人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない」。

3:28 「わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である」と言ったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。

3:29 花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。

3:30 彼は必ず栄え、わたしは衰える。

ただし、これは始まりであった。バプテスマを受けるに先立って、罪を認め悔い改めることと、主イエスを贖い主として受け入れ、信じ、従うという信仰と改心が前提になる。これには、ペテロが教えているように「明らかなる良心を神に願い求める」とは、キリストの贖いの死とそれに続く復活によって完成されたものになった。復活後のイエスがガリラヤの山で 11 人の弟子たちに世の人々に父と子と聖霊との名によってバプテスマを施すように次のように言われた。(バプテスマのヨハネのバプテスマは、子と聖霊の名はなかったはずだ。)

口語訳マタイ 28:18-20

28:18 イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いつさいの権威を授けられた。

28:19 それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、

28:20 あなたがたに命じておいたいつさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。

バプテスマのギリシャ語 $\betaαπτισμός$ は、世界最古のギリシャ語訳旧約聖書である七十人訳聖書(セブトゥアギンタ、BC277 に翻訳開始、パウロが使った聖書)に出てこない。しかし、これまで新約聖書から見たよう

に旧約時代からバプテスマに相当する儀式は存在した。それにも関わらずバプテスマという言葉が、旧約聖書に出ていない理由として以下の二つの仮説が考えられる。

まず、第一に、儀式の根本的变化がある。七十人訳聖書が編纂されたのは、まだバプテスマのヨハネやイエス・キリストが現れる前の時代だった。その時代のパレスチナを中心とした東半球のバプテスマは、儀式を受けるに先立ち、イエス・キリストを信じる信仰と悔い改めが求められるものではなく、まだ外形的な「洗いの儀式」であったのだ。そして、やっとバプテスマのヨハネがイエス・キリストの先駆けとしてユダヤの荒野で悔い改めを叫んだ時に、それまでの旧約の洗いの儀式は、神の国を迎える儀式へと発展する。さらにイエスによる宣教と「改革の時」を経て新しい契約の儀式として完成され、福音書記者、パウロなどの使徒たちによって、バプテスマの意味と目的が世の人々に宣べ伝えられた。今日のバプテスマは、この世では教会、来るべき世では天の王国に入るための儀式であり、神の救いの原則である福音、キリストを贖い主・救い主として受け入れることを表明する儀式である。新しい時代の到来を告げたバプテスマのヨハネの登場後、さらにはキリスト復活後のバプテスマと、七十人訳聖書(あるいはヘブライ語原典)の「洗い」の相違を明確にし、バプテスマの意味を正しく理解できるように記述することが、ティンダルやルターなど近世以降の聖書翻訳者の重要課題であった。そのため旧約聖書の「洗い」、「清め」を「バプテスマ」ではなく、「洗い」と表記するのが妥当と考えたであろう。これは、新約聖書において、ギリシャ語本文のマルコ 7:4 の $\betaαπτισμόν$ 、ヘブル 9:10 の $\betaαπτισμόν$ を「バプテスマ」ではなく、「洗い」(washing)と翻訳した説明にもなる。これは翻訳者の判断によるものだという証拠に前述で述べたように 1545 年のルター訳聖書では、ヘブル 9:10 を Taufen(ドイツ語のバプテスマ)と訳しているが、1984 年の新しい翻訳では、Waschungen(ドイツ語の洗い)と訳している。一方、旧約時代の西半球の人々は受け入れる準備ができる人々がいたので、救い主イエスの降誕に先立ち、歴代の預言者によって早くからイエスの贖いの教理、悔い改めとバプテスマの意味が教えられ、信じて悔い改めた人々がバプテスマを受けたことがモルモン書に記録された。彼らが持っていた旧約聖書に相当する記録(写本)の原典は、ヘブル語で書かれたものなので、ギリシャ語のバプテスマ($\betaαπτισμόν$)という言葉が書かれているはずはないが、現代の言葉に翻訳した時にその意味するところから、バプテスマという言葉をつかったということになる。

第二に、言葉は物、状態、思考内容などを第三者に伝える機能面を持つもので、時代や環境によって変化する性質がある。その例として、小麦を製粉したものは、「メリケン粉」→「小麦粉」→「フライ」、男性の仕事で着る「背広」→「スーツ」、米を炊いたもの「ごはん」→「ライス」、運動選手「スポーツ選手」→「アスリート」など多々ある。短縮してしまったものもある。以前は「何気なく」と言っていたものが「なにげに」、「さりげなく」

が「さりげに」などのように、元の言葉以上の意味をもつてしまつたものもあるが、ほとんどのものは、概念や物自体は変わってない。「小麦粉」と言おうが「フラー」と言おうが本質は、小麦を製粉したものに変わりがない。日本の歴史で考えると現代からの時間的間隔で、七十人訳聖書の編纂が始まったのは、江戸時代ということになる。七十人訳聖書の完成は紀元 100 年頃とみられており、400 年位かけて編集改訂が続けられており、この間の言葉の変遷はかなりのものがあつただろう。しかし、いかに古かろうと権威ある書籍に使用されている言葉はそのまま残す。例えば、1611 年に刊行された KJV で使われている言葉や言い回しの中には、現代の日常会話でめったに使うことがないものがあるが、そのまま残している。それが権威ある書物の所以である。

この方法で説明すると、罪や汚れから、水で身を清める儀式を旧約時代は「洗い」と言っていたものをギリシャ語で記録するようになった新約時代は「バプテスマ」と呼ぶように変わった。イエスによって古い契約のバプテスマから、新しい契約のバプテスマに変わったが、儀式が意味する基本概念は変わらない。旧約時代から続いている七十人訳聖書で λούσεις ὕδατις(「水による洗い」または「沐浴」)と称していた儀式を新約の時代にはバプテスマ βαπτισμα という言葉を使うようになったので、コリストの聖徒に宛てた手紙(コリスト人への手紙)のモーセにつくバプテスマの記述や、エビオン派の教会員宛てて書いた手紙(ヘブル人への手紙)で「洗い」ではなく「バプテスマ」を使ったわけだ。ルターはそのまま Taufen(バプテスマ)と訳し、ティンダルは Washing(洗い)と訳したが伝えようとしている内容は変わらない。そして、言い表し方が昔と変わったからと言って、すでに完成した権威ある書籍に書かれたものを変えることはしないので、七十人訳聖書に βαπτισμα が出てくることは永遠にない。

何れにせよ読む者が、概念や主旨を理解しやすいうように訳するのが翻訳者の大事な使命なので、もしバプテスマの概念を正しく伝えるのに「洗い」という言葉をそのまま残した方がよければそつただろう。例えば、エベソ人への手紙 5 章で、夫に妻を愛するように勧めた個所に次のようにある。

5:25 夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。

5:26 キリストがそうなさつたのは、水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、

ここでパウロは、キリストを信ずる夫の妻の愛し方を「キリストが教会を愛したように愛することだと教えている。それはキリストが「教会をきよめて聖なるものとするため」自分を与え、捨てた自己犠牲にある。同様に夫たるもののはバプテスマを受ける際に「イエスは主である」と証しする信仰の言葉を伴う「水で洗うこと」によって、キリストの死にあづかり、キリストともに葬られ、キリストがよみがえったように新しいのちに生き、キリストと同じ愛し方で妻を愛することができるということだ。バプテスマという言葉を使わずに

「水で洗う」という言い方をしているのは、魂の洗い清めの概念に重点をおき分かりやすくするためにだ。翻訳もそのまま「水で洗う」表現にしている。

以上のように旧約聖書にバプテスマという言葉が出てこないのは、翻訳上の理由によるものと私は考えている。伝承の途上で、その言葉が削除されたという説があるが、その意図、根拠が示されておらず私には理解できない。

|旧約時代の種々の洗いの例

何れも口語訳と七十人訳(LXX)

出エジプト 29:4

あなたはまたアロンとその子たちを会見の幕屋の入口に連れてきて、水で彼らを洗い清め、

ΕΞΟΔΟΣ

καὶ Ααρὼν καὶ τοὺς υἱούς αὐτοῦ προσάξεις ἐπὶ τὰς θύρας τῆς σκηνῆς τοῦ μαρτυρίου καὶ λούσεις αὐτοὺς ἐν ὕδατι.

出エジプト 30:17-20

30:17 主はモーセに言われた、 30:18「あなたはまた洗うために洗盤と、その台を青銅で造り、それを会見の幕屋と祭壇との間に置いて、その中に水を入れ、 30:19 アロンとその子たちは、それで手と足とを洗わなければならない。30:20 彼らは会見の幕屋にはいる時、水で洗って、死なないようにしなければならない。また祭壇に近づいて、その務をなし、火祭を主にささげる時にも、そうしなければならない。

ΕΞΟΔΟΣ 30:17-20

17 Καὶ ἐλάλησεν κύριος πρὸς Μωυσῆν λέγων 18 Ποίησον λουτήρα χαλκοῦν καὶ βάσιν αὐτῷ χαλκῆν ὥστε νίπτεσθαι· καὶ θήσεις αὐτὸν ἀνὰ μέσον τῆς σκηνῆς τοῦ μαρτυρίου καὶ ἀνὰ μέσον τοῦ θυσιαστηρίου καὶ ἐκχεεῖς εἰς αὐτὸν ὕδωρ, 19 καὶ νίψεται Ααρὼν καὶ οἱ υἱοὶ αὐτοῦ ἐξ αὐτοῦ τὰς χεῖρας καὶ τοὺς πόδας ὕδατι. 20 ὅταν εἰσπορεύωνται εἰς τὴν σκηνὴν τοῦ μαρτυρίου, νίψονται ὕδατι καὶ οὐ μὴ ἀποθάνωσιν· ἦ ὅταν προσπορεύωνται πρὸς τὸ θυσιαστήριον λειτουργεῖν καὶ ἀναφέρειν τὰ ὄλοκαυτώματα κυρίῳ,

民数 19:7

そして祭司は衣服を洗い、水に身をすすいで後、宿営に、はいることができる。ただし祭司は夕まで汚れる。

ΑΡΙΘΜΟΙ

καὶ πλυνεῖ τὰ ἱμάτια αὐτοῦ ὁ ἵερεὺς καὶ λούσεται τὸ σῶμα αὐτοῦ ὕδατι καὶ μετὰ ταῦτα εἰσελεύσεται εἰς τὴν παρεμβολήν, καὶ ἀκάθαρτος ἔσται ὁ ἵερεὺς ἐώς ἐσπέρας.

2列王 5: 10

するとエリシャは彼に使者をつかわして言った、「あなたはヨルダンへ行って七たび身を洗いなさい。そうすれば、あなたの肉はもとにくえって清くなるでしょう」。

ΒΑΣΙΛΕΙΩΝ Δ' 5:10

καὶ ἀπέστειλεν Ελισαιε ἄγγελον πρὸς αὐτὸν λέγων Πορευθεὶς λοῦσαι ἐππάκις ἐν τῷ Ιορδάνῃ, καὶ ἐπιστρέψει ἡ σάρξ σου σοι,
καὶ καθαρισθήσῃ. ■

以上

2020/03/31 改訂 佐々木健一

2020/05/07 字句修正
